

英語プログラムで学ぶ留学生の日本語学習動機 —GS(Global Studies)専攻学生に対する質問紙調査を基に—

三井久美子・藤原智栄美・上田俊介

1. はじめに

言語教育において、学習の成否を左右すると言われている重要な要因の一つとして、学習動機 (motivation) が挙げられる。日本語学習者の日本語習得プロセスにおいて、学習動機は、学習の開始・継続に学習者を駆り立て、学習目標の達成度合いに影響を与えるものである。そのため、日本語学習者の学習動機の特徴を明らかにすることは、効果的な日本語カリキュラムを策定・運営しその改善を行っていく上で重要であり、また、そうした特徴を知ることは、教師が日々の実践に向き合う際の材料となり得るものである。日本語学習者の学習動機については、これまで国内外で調査・研究が積み重ねられてきている。縫部他 (1995) は、ニュージーランドの大学生を対象に日本語学習動機の実態を調査し、「統合的志向」(日本での居住、日系企業への就職に関わる日本語学習動機)の高さに来日経験が影響を与えていることを指摘した。楊 (2011) では、台湾の大学における日本語学習者の学習動機に関して、日本語主専攻か非専攻かで異なる特徴が見られたとしている。また、日本国内の大学・大学院に在籍する日本語学習者を対象に調査した小林 (2008) は、学習動機が、(1) 日本語という言語・授業への興味、(2) 日本の現代文化への興味、(3) 日本人の行動・生活や歴史などに関する興味、(4) 母国での日本語人気や周囲の影響 (誘発的志向)、(5) 日系企業への就職や起業のため (道具的志向) という5つの因子から構成されることを示している。このように、さまざまな機関で行われた調査・研究結果から言えることは、日本語学習者の学習背景や環境により、学習動機の特徴に相違が見られるということである。

現在、日本の大学においては、留学生が日本語を学ぶ目的及びニーズの多様化が進んでおり、学習者のタイプに応じた日本語教育の提供が求められている。その多様化の一端として、様々な大学で展開されている英語プログラムで学ぶ留学生 (以下、英語基準学生) の数が増加傾向にある¹⁾ものの、英語基準学生が持つ日本語学習動機について焦点を当て、その特徴を考察

した研究はまだ少ない。そこで、本稿は、立命館大学国際関係学部の英語プログラムである Global Studies 専攻の留学生（以下 GS 生）に対して日本語学習動機に関する質問紙調査を実施し、その特徴を明らかにすることを目的とする。以下、次節では GS 生に対する日本語教育の枠組みについて説明し、第 3 節で調査の概要及び分析の観点について述べる。第 4 節において調査結果とそれに基づく考察を行い、最後にまとめと今後の課題を提示したい。

2. GS 生に対する日本語教育の枠組み

立命館大学国際関係学部は、2011 年度に英語で学位を修得するプログラム「Global Studies 専攻」を開設した。従来からある「国際関係専攻」の入学時期は春だけであるのに対し、GS 専攻は各年度春と秋の 2 期に入学・卒業時期が設けられている。GS 専攻は全ての科目が英語で提供され、卒業論文²⁾も英語で執筆する。GS 生は各国からの留学生と英語能力に長けた日本人学生によって構成されているが、そのうち日本語を母語としない留学生には外国語として日本語が必修科目に課されている³⁾。2011 年度から 2019 年度までの GS 専攻の入学者数と、そのうち外国語科目に日本語を選択している学生数を表 1 に示す。開設年度である 2011 年度は日本語選択者の割合はやや低い⁴⁾が、その後はおよそ全体の 6 割前後となっている⁴⁾。

表 1 GS 専攻入学者の日本語選択・継続履修割合

	GS 生数 (人)	日本語選択者 数(人)	日本語選択者 割合	継続履修者数 (人)	継続履修者 割合 ⁵⁾
2011 年度入学	54	24	44.4%	17	70.8%
2012 年度入学	71	46	64.8%	25	54.4%
2013 年度入学	63	37	58.7%	26	70.3%
2014 年度入学	66	40	60.6%	28	70.0%
2015 年度入学	76	47	61.8%	34	72.3%
2016 年度入学	68	40	58.8%	26	65.0%
2017 年度入学	59	36	61.0%	28	77.8%
2018 年度入学	104	60	57.7%	24	40.0%
2019 年度入学	96	59	61.5%	0	0.0%

日本語を選択した学生に課せられる日本語必修単位は 6 単位であり、入学初年度の 1 学期、あるいは 2 学期間で取り終えるものとされている。しかし、必修単位を取り終えた後も日本語の継続履修は可能であり、その単位は卒業所要単位として認められる。先述の表 1 には、各年度で日本語を選択した学生のうち、必修 6 単位を超えて単位を履修している継続履修者の割合

42 (462)

が示されている。年度によって若干の増減はあるものの、ほぼ7割前後の学生が、必修単位を取り終えた後も日本語を継続して履修していることがわかる。

次にGS生が受講する日本語科目について述べたい。GS生の入学時の日本語レベルは初級から超級と多岐にわたるが、GS生独自の日本語プログラムが設定されているのではなく、交換留学生向けの日本語プログラム（Study in Kyoto Program、以下SKP）の中にGS生が入り、SKP生と同一カリキュラムの中で日本語を受講することになっている。表2のとおり、レベルは初級から超級の8レベルにわたる。各レベルで「総合」科目が週5コマあり、それに週2コマの「聴解口頭」、1コマの「ライティング」科目が加えられて、計8単位で1つのパッケージとなっている。ただし、GS生は必修単位が6単位であるため、「聴解口頭」を除いた「総合」と「ライティング」で1つのパッケージとなり⁶⁾、基本的には入学してからの1学期間で必修単位を修得することが可能となっている。この中で、レベルIだけはSKPとは異なるGS生向けの日本語科目が設定されている。レベルIは日本語学習が初めての学生を対象とするが、初めての外国語学習であることから学習面で困難を覚える学生が少なくないため、週3コマで2学期間をかけて初級前半を終える形となっている。

表2 GS生の日本語履修レベルと各レベルの受講科目

レベル	受講科目 ※()の数字は週におけるコマ数	修得単位数
初級前半	I-1 総合(3)	計3単位
	I-2 総合(3)	計3単位
初級後半	II 総合(5)、ライティング(1)	計6単位
中級前半	III 総合(5)、ライティング(1)	計6単位
中級後半	IV 総合(5)、ライティング(1)	計6単位
上級前半	V 総合(5)、ライティング(1)	計6単位
上級後半	VI 総合(3)、ライティング(1)、聴解口頭(2)	計6単位
超級 ⁷⁾	VII 聴解口頭(1)、文章表現(1)、読解(1)	計3単位
	VIII アカデミック日本語(1)キャリア日本語(1)	計2単位

以上、GS生の日本語履修について概要を示した。GS生は特に日本語の知識はなくとも専門科目の単位修得には問題がなく、また必修で課せられている日本語に関しても6単位のみであり、1年次で必修単位を修得してしまえば、特にそれ以降日本語を履修する必要はない。しかし、先に述べたように、実際7割前後の学生が必修6単位を修得した後も、日本語を継続して履修している。そこには、必修単位を修得するためだけではない、日本語学習動機があるはずである。次節では、GS生の日本語学習動機の特徴を明らかにするために行った本調査につ

いて、概要を述べる。

3. 調査の概要

3.1 調査概要

2016年12月から2018年1月にかけて、立命館大学に在籍する英語基準学生のうち、日本語科目履修経験のある学生を対象に質問紙調査を実施し⁸⁾、GS生116名から回答を得た。調査は、紙面アンケート及びWebアンケートの二つの方法で行われた。質問はすべて英語によるものであるが、回答は日本語でも英語でも可とした。調査項目としては、まず、調査者により設定⁹⁾した45の日本語学習動機に関し、「1. 強く反対する (Strongly disagree)」「2. 反対する (Disagree)」「3. どちらとも言えない (Neither agree nor disagree)」「4. 同意する (Agree)」「5. 強く同意する (Strongly agree)」の5件法で回答してもらった。その他の質問項目としては、「45の学習動機以外の日本語学習の理由」「到達したい日本語レベル」「日本人と話す機会がどのくらいあるか」に加え、「日本語科目に対する要望」を尋ねた。

3.2 調査対象者

調査対象者116名の学年については、1年次が76名(65.5%)、2年次が25名(21.6%)、3年次が8名(6.9%)、4年次が4名(3.4%)、不明が3名(2.6%)である。性別については、男性が44名(37.9%)、女性が69名(59.5%)、無回答が3名(2.6%)となっている。母語は、中国語が33.6%(39名)、韓国語が21.6%(25名)、英語が13.8%(16名)、インドネシア語が6.9%(8名)、ベトナム語が4.3%(5名)、タイ語3.4%(4名)、ヒンディー語2.6%(3名)、スペイン語1.7%(2名)、ロシア語1.7%(2名)、アラビア語、ウガンダ語、ウズベク語、オリア語、広東語、グジャラティ語、ソマリア語、フィリピン語がそれぞれ0.9%(各1名)ずつである。その他、二言語を母語に挙げた調査対象者が4名(英語・中国語が1名、英語・台湾語が1名、英語・韓国語が1名、中国語・広東語が1名)であった。

次に調査対象者の日本語レベルについて述べたい。第2節で述べたように、立命館大学の日本語プログラムは、レベルI(初級前半)、II(初級後半)、III(中級前半)、IV(中級後半)、V(上級前半)、VI(上級後半)、VII・VIII(超級)の8レベルに分かれている。表3は、調査対象者の日本語レベルの割合を示している。初級レベルが約半数を占め、中級、上級がそれぞれ4人に1人程度という割合である。

表3 調査対象者の日本語レベル

クラス	人数	割合	レベル別割合
I-1	21名	18.1%	(初級)49.1%
I-2	13名	11.2%	
II	23名	19.8%	
III	14名	12.1%	(中級)23.3%
IV	13名	11.2%	
V	20名	17.2%	(上級)25.8%
VI	10名	8.6%	
VII	0名	0.0%	(超級)0.9%
VIII	1名	0.9%	
未記入	1名	0.9%	0.9%
合計	116名	100%	100%

「到達したい日本語レベル」に関しては、「上級」が44.8%（52名）、「母語話者レベル」が38.8%（45名）を占めており、全体の8割以上のGS生が上級レベル以上に到達することを希望している。「普段、日本人と話す機会があるか」に関しては、「時々ある」が69.8%（81名）、「とても頻繁にある」が28.4%（33名）であり、調査対象者ほぼ全員が、日常的に日本人と接する機会があることがうかがえる。日本人との接触機会でも多かったのは「買い物」（回答数34）で、次いで「友達と」（回答数28）、「学校で」（回答数22）との回答であった。

3.3 分析の観点

GS専攻留学生の日本語学習動機の特徴を明らかにするため、本稿では以下の三つの観点から分析を行っていく。第一の分析の観点は、「45項目の学習動機の中でGS生が重視している項目は何か」ということである。分析ではまず、上位項目、下位項目にいかなる学習動機が現れているのかを示すことで、GS生の日本語学習動機の傾向性について論じる。第二の観点は、「調査対象者の社会的属性により、重視する日本語学習動機に差異がみられるのか」である。分析では、調査対象者の社会的属性の中から、学年、日本語レベル、出身地域を取り上げ、日本語学習動機の平均値における社会的属性の差異という観点から統計的分析を行った。第三の分析では、学習動機の中から「将来のキャリアに関わる日本語学習動機」、「日本語学習そのものへの興味（内発的動機づけ）」という2つの側面に関し、GS生がいかなる傾向を示すのかをさらに掘り下げてみていくことにする。小林（2008）は、第二言語コミュニケーション意欲（Willingness to Communicate、以下WTC）^{10）}に関わる情意要因として日本語学習動機を取り上げ、日本国内の大学に在籍する留学生を対象に調査を実施している。調査の結果、現在の

日本語学習の楽しさや授業に対する興味（内発的動機）に加え、「就職・起業のため」という外発的動機が高い学習者は、日本語 WTC が高い可能性が示唆されており、日本語習得においてこれら二つの学習動機が重要であることを指摘している。内発的動機は、日本語コミュニケーション意欲を促進する要因であるだけでなく、日本語学習を継続するエンジンと言えるものであり、それらを考察することで GS 生が日本語及び日本語によるコミュニケーションをどのように捉えて日本語学習に向き合っているかという一端を浮き彫りにできるものと思われる。また、GS 生が、自身の日本語学習と将来の職業像をいかに結びつけているかを探っていくことは、日本語教育を通して GS 生に対するキャリア支援をいかに行っていかを考えることにもつながるだろう。次節では、以上の三つの観点について順に結果を示したい。

4. 調査結果及び考察

4.1 日本語学習動機の上位・下位項目に見られる特徴

本節ではまず、45 項目の中で、GS 生が重視しているもの、また、重視していないものを取り上げ、GS 生の動機づけの特徴を明らかにする。

表 4 に示すのは、日本語学習動機 45 項目のうち平均得点が上位であった 10 項目¹¹⁾ である。

表 4 調査対象者の平均得点(上位 10 項目)

	調査項目	MEAN	SD
1	04. 日本人の友達と日本語でコミュニケーションできるようになりたいから	4.61	.643
2	25. 日本語学習は日本での旅行に役立つから	4.58	.621
3	05. 日本人と友達になりたいから	4.51	.680
4	24. 日本語科目で良い成績が取りたいから	4.47	.678
5	35. JLPT に合格したいから	4.43	.760
6	26. 将来のキャリアに役立つから	4.42	.748
	34. 新しい人に会って友達になりたいから	4.42	.687
8	27. 日本語の映画やテレビ番組を理解できるようになりたいから	4.41	.722
9	41. アルバイトに役立つから	4.38	.733
10	08. 日本語学習は努力する価値があるから	4.35	.701

まず、45 項目の学習動機の中で最も値が高かったのは「日本人の友達と日本語でコミュニケーションできるようになりたいから (4.61)」で、「日本人と友達になりたいから (4.51)」「新しい人に会って友達になりたいから (4.42)」の 2 項目も上位にあることから、「日本人との交流志向」が日本語学習の大きな動機の一つであると言える。次に、「日本語学習は日本での旅

行に役立つから (4.58)」「日本語の映画やテレビ番組を理解できるようになりたいから (4.41)」という項目から、「日本文化・社会への関心」がうかがえる。「日本語科目で良い成績が取りたいから (4.47)」「**JLPT**¹²⁾に合格したいから (4.43)」は試験・成績に関する項目であり、これも一つの学習動機と言えるだろう。さらに「将来のキャリアに役立つから (4.42)」は将来の仕事に関する動機であるが、先に挙げた「**JLPT**に合格したいから」も**JLPT**が資格の一つであることから、キャリア志向の動機とも関わっていると考えられる。「アルバイトに役立つから (4.38)」は日常生活に関わる道具的な動機と言える。最後に「日本語学習は努力する価値があるから (4.35)」という項目からは、日本語を学習することに何らかの価値を見いだしている学生が多いことがわかる。

表5 調査対象者の平均得点(下位10項目)

	調査項目	MEAN	SD
1	31. 特に目的はないが、大学の科目にあったから	2.45	1.149
2	30. 中学や高校で日本語を勉強したから	2.48	1.557
3	12. 日本のゲームをするのが好きだから	2.70	1.464
4	42. 起業して日本と貿易したいから	2.98	1.207
5	29. 日本語は勉強し始めるのに易しい言語だから	3.03	1.162
6	09. 日本語を学びたくないが重要だとわかるから	3.23	1.167
7	32. 両親が学習を勧めたから	3.44	1.218
8	14. 卒業するために履修しなければいけないから	3.45	1.256
9	40. 自国で日本語が人気があるから	3.47	1.122
	36. 日本のアニメや漫画に興味があるから	3.47	1.361

表5は、日本語学習動機45項目のうち平均得点が下位であった10項目である。「特に目的はないが、大学の科目にあったから (2.45)」「中学や高校で日本語を勉強したから (2.48)」「日本語は勉強し始めるのに易しい言語だから (3.03)」「日本語を学びたくないが重要だとわかるから (3.23)」「両親が学習を勧めたから (3.44)」「卒業するために履修しなければいけないから (3.45)」「自国で日本語が人気があるから (3.47)」の項目は義務的・誘発的動機と言える。このことから、他要因から誘発されるような動機づけは低い傾向にあることがわかる。また、「日本のゲームをするのが好きだから (2.70)」「日本のアニメや漫画に興味があるから (3.47)」「起業して日本と貿易したいから (2.98)」は標準偏差の値が比較的高いことから、動機としては個人差が大きいものだと言えよう。

以上、上位・下位項目からみえる特徴としては、交流志向、キャリア志向、日本文化・社会への関心による動機づけが高く、義務的・誘発的動機づけは低い傾向があると言える。

4.2 社会的属性による日本語学習動機の差異

次に、調査対象者であるGS生の社会的属性により、重視する日本語学習動機に差異がみられるのかという観点から分析を行う。取り上げる社会的属性は、「学年」「日本語レベル」「出身地域」である。まず、「学年別」に関して、大西（2010、2011）は、ウクライナにおける日本語専攻大学生の日本語学習動機について学年層という観点からの分析を行い、低学年と高学年では動機づけの傾向性に差異があることを明らかにしている。本研究では、入学後間もない1年次の学生と継続して日本語学習を続けている2年次以上の学生という2群に分けT検定を行った。次に、「日本語レベル」については、日本語学習歴によって学習動機に差異が出るかという観点を基に、学習を始めて間もない初級者と、中級以上の学習者という点において有意差が見られるかを分析した。「出身地域」については、「東アジア」・「東アジア以外」という区分を設定した。その理由として、第一に日本との地理的近さに加え、第二に東アジア地域の学生は、表記面で日本語との共通性の高い漢字圏を出身地域とする学習者、また語彙・文法面の日本語との類似性から日本語習得において利点が大きいことが指摘¹³⁾されている韓国人学習者から成るが、そうした地理的及び言語的要因に鑑み、地域差による学習動機の差異が存在するのかどうかを分析の観点に加えた。表6は、その結果を示している。

表6 社会的属性により有意差が出た調査項目

	有意差が見られた項目	属性	平均値	t値 (自由度)	有意確率
学年別	卒業するために履修しなければいけないから	1年次生	3.79	4.306 (51.601)	P=.000
		2年次生以上	2.66		
	中学や高校で日本語を勉強したから	1年次生	2.75	3.150 (94.234)	P=.002
		2年次生以上	1.89		
日本語 レベル別	卒業するために履修しなければいけないから	初級	3.73	2.396 (111)	P=.018
		中級以上	3.18		
	外国語を学ぶのが好きだから	初級	4.33	2.270 (113)	P=.025
		中級以上	3.95		
出身 地域別	日本語は勉強し始めるのに易しい言語だから	東アジア	3.46	5.239 (106)	P=.000
		東アジア以外	2.37		
	日本語でレポート・論文を書きたいから	東アジア	4.18	3.313 (61.230)	P=.002
		東アジア以外	3.46		
	日本語を学びたくないが、重要だとわかるから	東アジア	3.40	2.425 (107)	P=.017
		東アジア以外	2.85		
	日本語クラスを取るのが好きだから	東アジア	4.16	2.206 (107)	P=.030
		東アジア以外	3.80		

まず、「学年別」「日本語レベル別」に共通して有意差が見られた日本語学習動機は、「卒業するために履修しなければいけないから」という項目である。学年別の分析結果では、「1年次生」の「卒業のために履修しなければいけないから」の平均値が高くなっており、また、日本語レベルでは「中級以上」より「初級」の方が高い値を示している。これは1年次及び初級レベルの学生には、必修単位を取り終えていない学習者が多く含まれているためだと考えられる。表からわかるように、出身地域別の分析で有意差が表れたのは4つの学習動機であるが、4つ全ての項目で、「東アジア出身」群の方が、平均値が高くなっていることがわかる。「日本語は勉強し始めるのに易しい言語だから」については、先に述べた、学習言語である日本語と母語との言語的特徴の共通性及び類似性が影響を与えているといえるのではないだろうか。「日本語でレポート・論文を書きたいから」についても「東アジア出身」群の方が高い値が示されており、アカデミック・ライティングに関する学習動機において有意差が存在することが分かった。

4.3 内発的動機づけに関する分析

内発的動機づけとは、ある活動が外的報酬に導いてくれるという理由からではなく、そのことだけが目的で行動しようとする欲求 (デシ 1980) を指す。内発的動機づけに基づく言語学習とは、自身が学ぶ言語そのものに対する肯定的意識に支えられた行動であり、また、学習すること自体に楽しみや喜びを見出す行為であるといえる。内発的動機づけが強くなるほど、学習者の自己決定性が高くなるとされており (Ryan and Deci 2000)、こうしたGS生の内発的動機には日本語学習に取り組む主体性の一側面が表れているといえるだろう。図1は、上述した「日本語学習に対する興味」に関わる学習動機についての調査結果を示している。

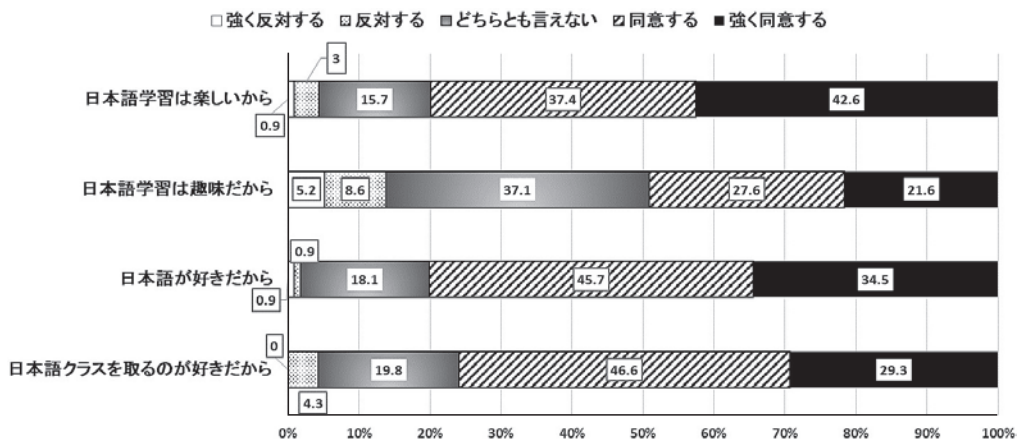


図1 GS生の内発的動機づけ

まず、「日本語学習は楽しいから」という学習動機については、「強く同意する」「同意する」を合わせると80%にのぼり、5人中4人の調査対象者が日本語学習そのものに対する楽しみを学習動機に挙げたことが明らかとなった。次の「日本語学習が趣味」であることを動機とする対象者は半数に満たないことが見て取れる。また、「日本語が好きだから」日本語学習を行うと回答したのは80.2%と、高い割合が示されている。「日本語クラスを取るのが好きだから」の値から、日本語科目受講に対する肯定的な捉え方を学習動機としているのは4人中3人であることがわかった。以上の結果から、日本語学習への内発的な動機づけは高い傾向にあることがわかる。3.3節で述べたように、小林(2008)は、日本語学習に対する興味という内発的動機づけが、日本語コミュニケーション意欲を促進する要因となる可能性を指摘している。4.1節の分析結果において、日本語学習動機45項目の中で最も値が高かったのは「日本人の友達と日本語でコミュニケーションできるようになりたいから」であり、その他の2つの交流志向に関わる日本語学習動機も上位項目に含まれていた。小林の指摘から、こうしたGS生の日本人との交流・コミュニケーションに関わる学習動機の高さには、内発的動機づけの高さによる日本語コミュニケーション意欲の促進という様相が反映されている可能性があると言える¹⁴⁾。

また、本研究と同内容の調査を実施し、政策科学部の英語基準学生の日本語学習動機に関して分析した藤原・大平・野々口(2019)では、日本語学習そのものを楽しみを見出す内発的動機づけと、日本語ライティングとの相関性について考察を行っている。結果としてEメール・SNSという日常生活におけるライティングに関しては内発的動機づけとの相関関係が見られなかったのに対し、「日本語でレポート・論文を書きたいから」というアカデミック・ライティングに関する学習動機との間に相関が見られたことを指摘している。上記のGS生の内発的動機づけと、アカデミック・ライティングに関して相関分析を行ったところ、「日本語学習は楽しいから」($r=.428, p < .01$)、「日本語学習は趣味だから」($r=.472, p < .01$)、「日本語が好きだから」($r=.437, p < .01$)、「日本語クラスを取るのが好きだから」($r=.495, p < .01$)という結果となり、4項目全てで中程度の相関が確認された。一方、「E-mail・SNSが書きたいから」は、「日本語学習が楽しいから」との間に低い相関($r=.036, p < .01$)が見られたのみであった。よって、本研究におけるGS生の内発的動機づけも、日本語のアカデミック・ライティング能力を伸ばしたいと考える動機¹⁵⁾の下支えとなっている可能性が考えられるだろう。

4.4 将来のキャリアに関わる日本語学習動機

本節では、GS生が考える将来のキャリアが日本語学習動機とどのように関わっているのかという観点から分析を行う。図2は、日本語学習動機45項目のうちキャリアに関わる4項目についての調査結果を表したものである。

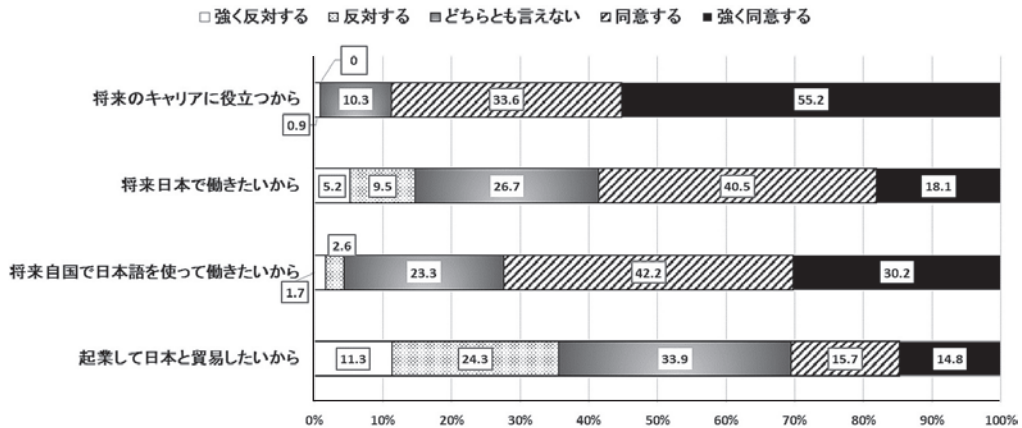


図2 将来のキャリアに関わる動機づけ

まず、「将来のキャリアに役立つから」という学習動機は、4.1節で見たように、平均得点が上位10項目に入っていた項目であるが、「強く同意する（55.2%）」と「同意する（33.6%）」を合わせて88.8%という高い割合に上っており、調査対象者の9割近くが日本語学習は将来のキャリアに資すると考えていることがわかった。次に、「将来自国で日本語を使って働きたいから」は「強く同意」・「同意」を合わせて72.4%と高い割合を示しており、調査対象者の約7割は日本に住まないまでも、何らかの形で日本語を生かした仕事がしたいと考えていると言える。一方、「将来日本で働きたいから」は58.6%と「自国で」に比べると低いとは言え、調査対象者の半数以上が日本での就職を視野に入れて日本語を学んでいることがうかがえる。最後に「起業して日本で働きたいから」は30.5%とやや低い割合となったが、「起業」を考えそれを日本語学習と関連づけて学んでいる学生も存在することがわかった。上記の結果からも、将来のキャリア形成において日本語を活かしたいということが、日本語学習動機の一要因であることがわかる。

上記の4項目のうち、「将来日本で働きたいから」という動機と「自国で日本語を使って働きたいから」という動機は、「日本語を使って働きたい」という点では共通しているが、「日本で」か「自国で」かという点では対立している項目である。そこで、この2項目間について、さらに掘り下げた分析をするために、他の日本語学習動機との相関分析を行った。以下、他項目との相関においての共通点と相違点について述べる。

表7 「将来日本で働きたいから」(A)、「将来自国で日本語を使って働きたいから」(B)に関する他の日本語学習動機項目との相関分析結果(共通点) (r = 相関係数、p < .01)

A, B に共通して相関の見られた項目	相関係数及び相関の度合い	キーワード
将来も日本で勉強を続けたいから	A. 日本 r=.601(中) B. 自国 r=.338(低)	将来のビジョン
将来のキャリアに役立つから	A. 日本 r=.485(中) B. 自国 r=.425(中)	
日本語で書かれた文献が読みたいから	A. 日本 r=.433(中) B. 自国 r=.389(低)	日本語能力の向上
JLPT に合格したいから	A. 日本 r=.331(低) B. 自国 r=.342(低)	
日本語が好きだから	A. 日本 r=.353(低) B. 自国 r=.374(低)	日本語学習への興味・関心
日本語学習は楽しいから	A. 日本 r=.301(低) B. 自国 r=.340(低)	
日本人の行動様式に興味があるから	A. 日本 r=.313(低) B. 自国 r=.332(低)	日本人の行動様式への興味・関心

表7は、2項目共に相関が認められた学習動機とその特徴をキーワードで示している。まず、「将来も日本で勉強を続けたいから」と「将来のキャリアに役立つから」は、いずれも「将来」を見据えた動機であり、将来、自国あるいは日本で日本語能力を活かして働きたいという学習動機は、「将来のビジョン」に関わる上記2項目との関連が見られた。次に、「日本語で書かれた文献が読みたいから」と「JLPTに合格したいから」の2項目を見ると、「日本語能力の向上」を目指す動機とも関連があることがわかる。さらに、「日本語が好きだから」と「日本語学習は楽しいから」という「日本語学習への興味・関心」を示す2項目は、前節で述べた通り内発的動機と言えるが、これらの動機とも関連していることがわかった。最後の項目として、「日本人の行動様式への興味」との相関も認められた。

表8 「将来日本で働きたいから」(A)、「将来自国で日本語を使って働きたいから」(B)に関する他の日本語学習動機項目との相関分析結果(相違点) (r = 相関係数、p < .01)

Aのみに相関の見られた項目	相関係数及び度合	キーワード
将来日本に住みたいから	r=.819(高)	将来のキャリア
起業して日本と貿易したいから	r=.318(低)	
日本語でレポート・論文を書きたいから	r=.488(中)	日本語能力の向上
日本の雑誌・新聞記事を読みたいから	r=.454(中)	日本文化への興味・関心
日本の歴史に興味があるから	r=.330(低)	
日本語クラスを取るのが好きだから	r=.407(中)	日本語学習への興味・関心
日本人の友達とコミュニケーションできるようになりたいから	r=.302(低)	日本人との交流への意欲
日本人と友達になりたいから	r=.324(低)	
新しい人に会って友達になりたいから	r=.301(低)	
Bのみに相関の見られた項目	相関係数及び度合	キーワード
日本語学習は日本での旅行に役立つから	r=.334(低)	日本文化への興味・関心
日本語の映画やテレビ番組を理解できるようになりたいから	r=.359(低)	
日本文化を理解したいから	r=.377(低)	
アルバイトに役立つから	r=.315(低)	アルバイト
日本語学習は趣味だから	r=.360(低)	日本語学習への興味・関心
自国で日本語が人気があるから	r=.363(低)	自国の日本語人気
日本語学習は努力する価値があるから	r=.339(低)	努力する価値

次に、それぞれの項目のみで相関が見られた項目を表8に挙げる。「将来日本で働きたいから」のみとでは、「将来日本に住みたいから」と高い相関が見られた。また、「起業して日本と貿易したいから」との相関も見られ、将来も日本と強い関わりを求める項目とのつながりが認められた。また、「日本語でレポート・論文を書きたいから」という項目からは、さらに進んだレベルを目指す「日本語能力の向上」と関連があることがわかる。他には「日本文化への興味・関心」「日本人との交流への意欲」等に関わる項目との関連性が見られた。対して、「自国で日本語を使って働きたいから」のみと相関が認められた項目を見ると、「日本文化への興味・関心」が中心であり、その他には「アルバイトに役立つから」や「自国で人気があるから」等の項目であった。「日本文化への興味・関心」という点では、両者とも共通しているが、それぞれの項目を比べると「自国で」の方は「旅行」や「映画やテレビ番組」等への関心という、どちらかと言えば「娯楽性」を求めた日本文化理解を志向しているのに対し、「日本で」の方は「雑誌・新聞記事」や「歴史」への関心という「日本についての深い知識」を得ることを志向したもの

だと言える。さらに、「日本で」には3項目見られた「日本人との交流への意欲」との相関が「自国で」は認められなかったのも特徴的である。「日本人との交流への意欲」は、日本の社会やその文化に同化し、統合しようとする「統合的動機づけ」(Gardner & Lambert 1972)と考えられる。これらの相関結果から、「将来日本で働きたい」という動機は「日本についての深い知識」や「日本社会への深い関わり」を志向する動機と関連性があり、対して「自国で日本語を使って働きたい」という動機は、娯楽性や日常の利便性を志向する動機と関連性があると言える。

4.5 自由記述に関する調査結果

最後に、自由記述について述べる。まず、「45の日本語学習動機以外の日本語学習の理由」については、「自分が日本人だから」「母が日本で生まれ育ったから」「ハーフとして、日本語がスムーズに使えるといいから」といった回答者の出自にかかわる回答が見られた。このことから、日本にルーツを持ちながら、日本語を母語としない学習者が一定数存在し、それが学習動機につながっていることがわかる。次に、「日本語プログラムへの要望」であるが、この項目への自由記述回答数のうち、最も多かったのが「日本人（日本人学生）との接点を作ってほしい」（8名）であり、次いで多かったのが「実践的な会話授業」（6名）であった。分析結果では「日本人との交流志向」が一つの動機づけとなっていたことがわかったが、これらの要望にもそれが反映されていると言える。「実践的な会話授業」については、第2節で述べたように、大部分のGS生は聴解口頭クラスを履修しないことから、「会話」へのニーズが高くなっていると考えられる。「日本語授業を履修していない理由」については、今回の調査でGS生においては現在も日本語を履修している学生が調査対象の中心となったため、この項目への回答はわずかであった。「もうすぐ卒業するから」という回答の他に、「1週間あたりの日本語授業の時間数が多く、十分な自習時間を確保できないから」「好成绩を修められないとGPAが下がる懸念があるから」という回答が見られた。このような回答は、本調査の対象者では少数派であるが、GS生の日本語コースを運営する上で、一考の余地はあると思われる。

5. まとめと今後の課題

以上、日本語科目履修経験のあるGS生を対象に実施した質問紙調査について調査結果と考察を述べた。調査の結果をまとめると、GS生の日本語学習動機においては、「交流志向」及び「キャリア志向」が高い一方で、「卒業するために履修しなければいけないから」のような義務的動機づけは低い傾向であることがわかった。また、学生の社会的属性による違いを分析したところ、東アジア出身の学習者は、「日本語が学習を始めるのに易しい言語だから」とい

う日本語学習の簡易性やアカデミック・ライティングの学習動機においてより高い傾向を示すなど、学習者の出身地域による有意差が確認された。さらに、キャリアに関わる学習動機と他項目との相関分析を行ったところ、「日本で就職」という学習動機は、「より高度な日本語能力」や「日本人との交流」等を志向する、将来的にも日本との強い関わりを求める学習動機と関連があることがわかった。調査対象者の内発的動機を見ても総じて高い傾向にあり、日本語学習に対して肯定的な姿勢を持っていると言えるだろう。

GS生のような英語基準学生は英語だけで学位が取れ、入学時の日本語レベルも問われないため、「入学時には全く日本語を解さない学生が中心であり、彼らが必要とする日本語力はサバイバル程度で十分なのではないか」との見方も存在する。しかし、実際には入学時の日本語力は多岐にわたる上に、本研究の調査結果から調査対象者の多くが希望する日本語能力は上級以上であることがわかった。留学先に日本を選んだ理由は個人々人によって異なると思われるが、それぞれが「日本で学ぶ」ということに意義を見いだそうとし、日本語を活かして日本での学生生活を、さらに将来のキャリアの向上を意識しながら日々の日本語学習に向かっているという調査対象者の傾向性が本研究のデータに表れていたと言えるのではないだろうか。この結果をカリキュラム運営に活かしていくためには、GS生の日本語学習動機の大きな特徴といえる「交流志向」、そして「キャリア志向」というニーズを盛り込んだ教育内容の提供を考えていく必要があるだろう。

今回は現在日本語科目を履修中である学生を主な調査対象者とし、日本語科目を受講している動機を明らかにした。しかし、日本語科目の必修単位を取り終えた後に継続履修をしていない学生も3割前後存在している。継続履修をしていない学生に対しても調査を行い、継続をしなかった理由や、継続履修をする学生と日本語学習動機に違いがあるのか等も明らかにする必要がある。プログラム運営・改善のためにも、それらを今後の課題としたい。

付記：本研究は、2016年度立命館大学国際言語文化研究所萌芽的プロジェクト研究助成プログラムによる研究成果の一部である。

【資料】日本語学習動機項目一覧(平均値、標準偏差)

1. 日本文化を理解したいから	4.21	0.692
2. 別言語を学びたいから	4.32	0.787
3. メール・SNSを書きたいから	4.22	0.873
4. 日本人の友達と日本語でコミュニケーションできるようになりたいから	4.61	0.643
5. 日本人と友達になりたいから	4.51	0.680
6. 日本語学習は楽しいから	4.17	0.881

7. 日本語学習は趣味だから	3.52	1.083
8. 日本語学習は努力する価値があるから	4.35	0.701
9. 日本語を学びたくないが重要だとわかるから	3.23	1.167
10. 日本語が好きだから	4.12	0.793
11. 日本語を知っていることで他者から尊敬され得るから	3.63	1.037
12. 日本のゲームをするのが好きだから	2.70	1.464
13. 日本語学習により称賛を得たいから	3.60	0.989
14. 卒業するために履修しなければいけないから	3.45	1.256
15. 日本語で書かれた文献を読みたいから	4.27	0.831
16. 日本語でレポート・論文を書きたいから	3.92	1.031
17. 日本の文学に興味があるから	3.51	1.043
18. 日本語クラスを取るのが好きだから	4.01	0.818
19. 日本の雑誌・新聞記事を読みたいから	4.29	0.791
20. 将来も日本で勉強を続けたいから	3.87	0.965
21. 将来日本に住みたいから	3.61	1.011
22. 将来日本で働きたいから	3.57	1.057
23. 将来自国で日本語を使って働きたいから	3.97	0.894
24. 日本語科目で良い成績を取りたいから	4.47	0.678
25. 日本語学習は日本での旅行に役立つから	4.58	0.621
26. 将来のキャリアに役立つから	4.42	0.748
27. 日本語の映画やテレビ番組を理解できるようになりたいから	4.41	0.722
28. 日本語の歌を聴いたり、歌ったりして楽しみたいから	3.88	1.040
29. 日本語は勉強し始めるのに易しい言語だから	3.03	1.162
30. 中学や高校で日本語を勉強したから	2.48	1.557
31. 特に目的はないが、大学の科目にあったから	2.45	1.149
32. 両親が学習を勧めたから	3.44	1.218
33. 日本語は自分の視野を広げるのに重要だから	4.13	0.770
34. 新しい人にとって友達になりたいから	4.42	0.687
35. JLPT に合格したいから	4.43	0.760
36. 日本のアニメや漫画に興味があるから	3.47	1.361
37. 日本人の行動様式に興味があるから	3.64	0.929
38. 日本人のライフスタイルと習慣に興味があるから	3.92	0.846
39. 日本の歴史に興味があるから	3.51	1.034
40. 自国で日本語が人気があるから	3.47	1.122

41. アルバイトに役立つから	4.38	0.733
42. 起業して日本と貿易したいから	2.98	1.207
43. 伝統的な日本の文化に興味があるから	3.74	0.965
44. 外国語を学ぶのが好きだから	4.13	0.928
45. 漢字の理解を深めたいから	3.91	1.111

注

- 1) 堀内（2018）はグローバル 30 以降、10 年足らずの間に国内の大学や大学院における英語プログラムが大幅に増加していることを指摘している。
- 2) 2018 年度より必修化された。
- 3) 日本国籍を有していても、日本語が母語ではない場合は、日本語の履修が許可される。
- 4) 2018 年度に定員数が増えたが、それ以降もこの割合は変化していない。
- 5) 2016 年度以降の学生は現在も在学中であるため、表 1 の継続履修割合より増加する可能性がある。
- 6) レベルⅥのみ他レベルと受講科目が異なっているため、GS 生は「総合」、「聴解口頭」、「ライティング」の 3 科目を受講することとなっている。
- 7) レベルⅦとⅧは日本語基準正規留学生向けに開講される日本語科目である。レベルⅥを終えた学生、または学期開始前のプレースメントテストでレベルⅥ以上と判定された学生はレベルⅦに入り、日本語基準入学の 1 年次生とともに 2 学期間で 6 単位を修得する。
- 8) 英語プログラムを有する 2 学部（国際関係学部・政策科学部）で学ぶ学生を対象とした。
- 9) 縫部他（1995）、郭・大北（2001）、小林（2008）等で挙げられた日本語学習動機を基に項目を検討し、立命館大学の英語基準学生の現状に合わせて項目の追加、削除を行った。
- 10) Macintyre 他（1998）は、WTC を “a readiness to enter into discourse at a particular time with a specific person or persons, using a L2 (p.547)” と定義し、WTC を第二言語教育の主たる目標に位置付けている。
- 11) 調査における 5 段階尺度に基づき 1 点～5 点までの得点化を行った上で順位付けを行った。
- 12) JLPT とは「日本語能力試験（Japanese Language Proficiency Test）」の略称である。
- 13) 嶋田（2014：3）は、「韓国では漢字使用は限られている点では非漢字圏と同じような漢字習得の難しさはあるものの、日本語との言語間距離の近さなどから習得のスピードは速い」と述べている。
- 14) 内発的動機づけと交流志向に関わる項目との相関をみたところ、内発的動機づけ 4 項目全てと相関が見られたのは「新しい人に会って友達になりたいから」で、「日本人の友達と日本語でコミュニケーションできるようになりたいから」「日本人と友達になりたいから」の 2 項目は、「日本語学習は趣味だから」以外の 3 項目との間で相関（ $p < 0.1$ ）が認められた。
- 15) 「日本語でレポート・論文を書きたいから」という学習動機は、「強く同意する」が 35.3%、「同意する」が 33.6% であり、アカデミックな日本語の習得を学習動機に挙げた学生が 7 割近い結果となった。「強く反対する」は 1.7%、「反対する」は 8.6%、「どちらとも言えない」は 20.7% である。

参考文献

大西由美（2010）「ウクライナにおける大学生の日本語学習動機」『日本語教育』147 号 82-96 日本語教

育学会

- 大西由美 (2011) 「目標達成見込みの高低と動機づけの関連：ウクライナにおける日本語専攻大学生の動機づけ調査」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』12, 21-40
- 郭俊海・大北葉子 (2001) 「シンガポール華人大学生の日本語学習の動機づけについて」『日本語教育』110号 130-139 日本語教育学会
- 小林明子 (2006) 「第二言語教育における Willingness to Communicate に関する研究の動向」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部 第55号 285-293
- 小林明子 (2008) 「日本語学習者のコミュニケーション意欲と学習動機の関連」『広島大学大学院 教育学研究科紀要』第二部 第57号 245-253
- 小林由子 (2016) 「日本語学習研究における『内発的動機づけ』の再検討」北海道大学国際教育研究センター紀要20号、81-92
- 嶋田和子 (2014) 「非漢字圏学習者に対する日本語指導法：『学ぶこと・教えること』の抜本的な見直し」ウェブマガジン『留学交流』2014年12月号 vol.45
https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/_icsFiles/afieldfile/2015/11/18/201412shimadazuko.pdf (2019年10月23日アクセス)
- 高橋雅子・平山紫帆 (2014) 「留学生の日本語学習動機の研究に関する現状と課題：日本語教育における文献調査より」『立教大学ランゲージセンター紀要』31号 95-102
- E・L デシ (1980) 『内発的動機づけ：実験社会心理学的アプローチ』誠信書房
- 西原鈴子 (2013) 「大学の国際化と日本語教育」『シリーズ 新しい日本語教育を考える』1, 15-41 立教大学日本語教育センター
- 縫部義憲・狩野不二夫・伊藤克浩 (1995) 「大学生の日本語学習動機に関する国際調査：ニュージーランドの場合」『日本語教育』86号 162-172
- 廣森友人 (2002) 「第二言語／外国語教育における言語学習動機づけ研究：動機づけ研究の新しい枠組みへ」『Hokkaido JACET Journal』1号 19-31
- 廣森友人・田中博晃 (2006) 「英語学習における動機づけを高める授業実践：自己決定理論の視点から」Language Education & Technology 43, 111-126
- 藤原智栄美・大平幸・野々口ちとせ (2019) 「英語基準学生の日本語学習動機に関する一考察：CRPS (Community and Regional Policy Studies) 専攻学生に対する質問紙調査より」『政策科学』26巻2号 13-25
- ブッシュネル・ケード (2013) 「グローバル30プログラムにおける学生の日本語学習ニーズに関するアンケート調査報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』28号 393-408
- 堀内喜代美 (2018) 「英語プログラムと留学生受け入れ姿勢の関係性：入試要項から見える傾向とアンビバレンス」『留学交流』2018年6月号 Vol. 87 https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2018/_icsFiles/afieldfile/2018/06/07/201806horiuchikiyomi.pdf (2019年10月27日アクセス)
- 守谷智美 (2002) 「第二言語教育における動機づけの研究動向：第二言語としての日本語の動機づけ研究を焦点として」『言語文化と日本語教育』増刊特集号 315-329
- 八島智子 (2004) 『外国語コミュニケーションの情意と動機』関西大学出版部
- 楊孟勳 (2011) 「台湾における日本語学習者の動機づけと継続ストラテジー：日本語専攻・非専攻学習者の比較」『日本語教育』150号 116-130 日本語教育学会
- 羅曉勤 (2005) 「学習者のモチベーションを研究する」西口光一 (編) 『文化と歴史の中の学習と学習者：

日本語教育における社会文化的パースペクティブ』凡人社 189-211

- Apple, M.T., Silva, D.D., & Fellner, T. (2013). *Language learning motivation in Japan*. Multilingual Matter.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum Press.
- Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Dörnyei, Z. (2009). The L2 motivational self system. In Dörnyei, Z. and Ushioda, E. (eds), *Motivation, language identity and the L2 self*. 9-42. Bristol: Multilingual Matters.
- Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2001). *Teaching and Researching Motivation*. 2nd edition. Harlow Pearson.
- Gardner, R. C., & Lambert, W. E. (1972) *Attitudes and motivation in second language learning*, Rowley, MA: Newbury House.
- Gardner, R.C. (1985). *Social psychology and second language learning*. London: Edward Arnold.
- Gardner, R.C. (2010). *Motivation and second language acquisition*: New York: Peter Lang Publishing.
- Gardner, R.C., & Lambert, W.E. (1959). Motivational variables in second language acquisition. *Canadian Journal of Psychology*, 13, 266-272.
- Macintyre, P.D., Dörnyei, Z., Clement, R, Noels, K.A. (1998). Conceptualizing Willingness to Communicate in a L2: A Situational Model of L2 Confidence and Affiliation, *Modern Language Journal*, 82, 545-62.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
- Ushioda, E. (1998). Effective motivational thinking: A cognitive theoretical approach to the study of language learning motivation. In: Alcón Soler, E., and Codina Espurz, V. (eds.) *Current issues in English language methodology*. Castelló de la Plana, Spain: Publicacions de la Universitat Jaume I, 77-89.

(三井久美子、立命館大学国際関係学部准教授)

(藤原智栄美、立命館大学政策科学部教授)

(上田俊介、神戸医療福祉大学社会福祉学部経営福祉ビジネス学科講師)

Motivations for Studying Japanese among International Students –A survey of students in the Global Studies Major–

This study aims to determine the common motivations for studying Japanese among international students in a degree program conducted in English. We administered a questionnaire survey to international students taking Japanese courses under the Global Studies major in the College of International Relations at Ritsumeikan University. The results of this survey show that the two most common motivations for studying Japanese among GS students are interactions with Japanese people and personal career goals, and motivations related to obligations (such as, “I need to take the course to graduate”) were not very common. The survey confirms a significant difference in motivations based on a student’s country of origin. For example, academic writing and the ease of studying Japanese (as displayed by answers like “Japanese is an easy language to start learning”) were common among students from East Asia. The correlation analysis for motivations based on career goals and other motivations revealed that motivations to eventually work in Japan are related to motivations to maintain a strong relationship with Japan in the future, as in a higher level of Japanese competency or an aspiration for interactions with Japanese people.

(MITSUI, Kumiko, Associate Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)

(FUJIWARA, Chiemi, Professor, College of Policy Science, Ritsumeikan University)

(UEDA, Shunsuke, Lecturer, Department of Management Welfare Business, Faculty of Social Welfare,
Kobe University of Welfare)